

編集委員会から

冊子体 vs. 電子ジャーナル

毎回、同じような話題で申し訳ありません。今回は電子ジャーナルと冊子体についてです。前回、話題にとりあげたオープンアクセスメガジャーナル（OAMJ）は電子ジャーナルのみですが、多くの学術雑誌は電子ジャーナルと冊子体の2つの形態で出版され、それぞれに ISSN¹⁾ が割り当てられています。日本食品工学会誌（JJFE）ですと電子ジャーナル（Online）ISSN：1884-5924、冊子体（Print）ISSN：1345-7942 です。

電子ジャーナルの特徴は二次利用が容易であることです。またデータベースとしての役割も大きく、さまざまな検索エンジンにより分析することができます。二次利用のためには著作権規定を厳密に定めなければならず、18巻3号（2017年9月発行）で紹介したクリエイティブ・コモンズが利用されているのはそのためです。

論文の場合はPDFファイルとして頁ごとに閲覧するという方法が主流ですが、冊子体になると専用のファイル形式とビューアーにより、あたかも本を読んでいるような感覚で扱うことができます。また、ご承知のように専用のハードウェアもあります。最近のスマートフォンは、いろいろなソフト（アプリ）があり、楽に記事を読めるようになっています。

一方で冊子体の価値は、表紙・装丁をはじめとした本としての形態にもあります。稀書と呼ばれるような書籍ですと、非常に高価になります。もちろん学術雑誌が稀書になることはありませんし、図書館に所属される段階になると数冊をまとめて一冊として、丈夫ではあるもののデザイン性のない表紙がつけられてしまいます。

なぜ、このようなことをグダグダと書いているかということと日本食品工学会誌の表紙の色は毎年変えているからです。お気づきかどうかわかりませんが、表紙の色は寒色と暖色から交互に編集委員会委員長と事務局が相談して決めています。第18巻（2017年）は暖色でワインレッドでした（現在の表紙デザインは2代目です）。

第19巻（2018年）は寒色として薄縹（うすはなだ）を選びました。縹とは（私も不勉強で知りませんでした）明度が高い薄青色で露草色に属するようです。もともと、露草から出した色素（染料）染めていた色で、枕草子にも出てくるように長い歴史があります。この記事をお読みの方には色がおわかりでしょうが、PCのディスプレイ上の色と、実際の刷り上がりの色は異なるため、この記事を書いている私にはわかりません。お気にいってもらえるとよいのですが。

電子ジャーナルには表紙がないので（表紙を作成している電子ジャーナルもありますが）、色について議論をすることはありません。最近、会員への冊子体送付を別料金として設定する、学生会員には送付しないという学会もあるようです。

冊子体 vs. 電子ジャーナル みなさまは、どうお考えでしょうか。

（山口大学 山本修一）

¹⁾ ISSN (International Standard Serial Number, 国際標準逐次刊行物番号)。日本では、国立国会図書館が ISSN 日本センターとして ISSN を登録・管理している。